
セツナ

OB

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セツナ

【Nコード】
N4445S

【作者名】
OB

【あらすじ】
過去の記憶が無い倭人のセツナは犯罪組織が巣食う街で暮らしていた。
人殺しを嫌い、犯罪組織には関わろうとしないセツナはある時ヘレナと出会う。
クローンを迫害しているアドヴァンス教会を阻止すべく二人は力を合わせて戦うことに……。

第一話

ほとんどが煉瓦で造られた街での事です。

この街は洋国大陸で最も治安の悪い街として知られています。

何故なら犯罪組織が日々争い、無関係の人まで巻き込んで殺してしまうという悲劇が何度もあるからです。

夜になればまるでお祭りのパレードのように爆発音や銃声が聴こえてきます。

そして、ちょうど今そのような時間帯。

何処からか聴こえる破裂したような音。

地面に溜まる血液と転がる死体を一人の男が平気な顔で通って行きます。

黒のビジネススーツ姿の男はまだ若い顔立ちで少し長めの茶髪。

瞳は洋国特有の青い色で冷ややかさを感じさせます。

街から出ると一面草原の静かな景色。

男の視線の先には木製の小屋があります。

人が住んでいると思えない程脆く、地震の揺れで一番先に崩壊するのではないだろうか。

小屋の中へと入る木製のドアの前に五段ある階段。

そこを上り、ノックもせず男はドアを開けました。

「……」

男の視界に映ったのはまるで来るのを知っていたかのように待っていた一人の少女。

紅玉の瞳で男を睨んでいます。

腰には一本の刀を差していました。

倭人特有の黒髪と幼い顔立ち。首には赤いマフラーを巻き茶色のコートと黒のズボン姿。

「お前がセツナだな？」

「……」

少女は答えません。

「お前に話がある」

「……」

それでも返答しない少女。男はそれでも話を進めて行きます。

「俺はキングのボスをやっているんだ」

男は椅子に座ると古いテーブルの上に足を乗せた格好で喋ります。

「お前がクローンだろうがそんなのは関係ない。俺は力ある奴だけを仲間にする。つまり」

「……」

「セツナ、キングに入」

「断る」

少女の第一声が男の話を遮りました。

次に、

「さつさと帰れ、私は頼まれた仕事をしたい」

少女は自室から出て行ってしまいました。

取り残された男は口元から笑みを浮かべ、ポケットに入っていた携帯電話を取り出します。

着信履歴から番号を探し出しボタンを一回押して発信させました。受話器に耳を近づけ男は相手の声を待ちます。

『はい、ボス』

女性の声です。

「お前と同じ特殊クローンがこの街にいるそいつを消せ、名前はセツナ、倭人だからな見ればすぐ分かる」

『……はい』

通話は終わり、男は口元に笑みを浮かべながら少女の部屋から出て行きました。

先に自室から出た少女、セツナは街の公園にいます。

公園の前には小さな酒場が一軒、そこに用があるようです。

店内に入ると数人の客と店員がいました。

客にお酒が入ったグラスを運ぶ店員で唯一の女性も、カウンター

で酔った客の相手をしている中年の男性も皆バーテンダーのような服装。

セツナはカウンターに背を向けてワイングラスを洗っている少年に寄って行きます。

そして、その少年の襟首を後ろから思いつきり掴むと無理矢理こちらを向かせました。

「セ、セツナ!？」

短い金髪に青い瞳、意志の弱そうな表情でセツナを見ます。

「昨日老人に孫娘が行方不明なので探してほしいと頼まれた」

「へ、へえ、た、大変だね」

「孫娘の情報を探していたらどうやらこの街で売春行為をさせられていると聞いた」

「……」

徐々に少年の表情が強張っていきます。

「ジャン、酒場の倉庫で何をしている?」

「し、知らない!」

ジャンと呼ばれた少年は必死に首を横に振ります。

「……」

セツナは襟首を掴んだ手に力を入れると、ジャンの顔をそのまま煉瓦の壁へと叩きつけました。

その震動で棚から商品のワインボトルが落ちて地面で割れてしまします。

煉瓦の壁は血で汚れ、ジャンの鼻や額、唇と鮮血が溢れ出ていました。

お客も思わず口を開けて、啞然とします。

「正直に答える」

「……ゴメン」

か細い声で謝罪するジャンにセツナは納得したのか襟首を離しました。

力無くジャンは座り込みます。

駆け寄る他の店員達は慌てて応急手当を施しました。
セツナは足早に酒場の倉庫へ。

倉庫は地下にあるようで、セツナは暗い階段を下りて行きました。
人間では見えにくい暗さですがセツナの視界からは明るく映ります。

「……？」

人がいるような気配はありません。

地下には酒やワインが入った樽が積まれていました。

「……」

行き止まりでもある一番奥に辿り着くと、確かにそこには人がいました。

ですが動きません。

上半身裸のまま男が三人倒れていたのです。

頭部には小さな穴、そこから鮮血が溢れ出ていました。

「まだ新しい……」

「貴様がセツナだな？」

セツナしかいないはずの倉庫から別の声が聞こえてきました。

「残念だが探している娘は森の中で殺されていた」

響き渡る革靴の音。それは後ろから。

セツナは来た道を振り返ります。

視界には一人の少女。長い茶髪を後ろで結った髪型。そして力強く真っすぐな青い瞳。

両手に拳銃が二挺。腰には二本の刀を差しています。

「誰だ？」

「今から死に逝く奴に名乗る名は、無い！」

銃口から飛び出す弾丸。

セツナは驚くべき反射神経で刃を抜刀し弾を真っ二つに斬り落としました。

「覚醒をしていないのにその反応」

少女はさらに何発も銃弾を撃ち続けます。

「む」

セツナの動きは鈍さを感じられます。長時間は続かないようです。そうこうしている内にとうとう隅に追いやれてしまいました。

「なんだ、避けるだけか？ 貴様」

「……」

セツナは無言のまま白銀の刃を前に構えているだけです。

「所詮自分の力も知らぬ身だ。その状態でいつまでも避けられないだろう」

これで最後だ、と少女は引き金を力強く押さえました。

ですが、

「なっ？」

「……」

掠れた音だけが響きます。もう一挺も同じ音しか出ません。

そう、弾切れです。

「しまっ」

セツナはすぐ様少女の胸元まで接近し二挺の銃身を簡単に切断させました。

「っ！」

次にセツナは刀の柄を少女の腹部に打撃を与えます。

その衝撃は少女の意識を飛ばしてしまいそうです。

それでも少女はセツナを視界から離しません。

ふらついてしまう両足を地面に踏ん張らせ、拳銃を投げ捨てました。

次にマフラーと襟を両方掴み、セツナは壁へと突き飛ばされています。

その隙に少女は刀を二本鞘から抜き取り構えました。

灰色の刃と輝きの無い漆黒の刃がセツナに向けられます。

「ゴホッゴホッ……貴様！ その力をキングの為に使おうという気はないのか？」

「無い」

戸惑う事無く答えるセツナ。

「ならば今度こそ殺してやる」

少女はセツナに向かって走り出しました。

二本の刃が左から右へと横に動きます。

「不気味な刀だな？」

一本の刀で少女の攻撃を弾いたセツナ。

「倭国の宝刀、というやつだ」

返答しながらも少女は斬撃をやめません。

上から下からと刃が襲いかかりセツナは全く反撃することができません。

左から右へと振られる刃をセツナはしゃがみ込んで回避します。すると後ろにあった酒樽が代わりに割れ、中からアルコールの入ったお酒が地面に零れてしまします。

「……」

セツナの全身にもお酒がかかります。

嫌なんでしょうか眉をひそめました。

振り翳された二本の刃がセツナに向けて急降下してきます。

それを一本の刃で受け止め、セツナは力ずくで立ち上がりました。そのままの勢いで少女を押し返します。

少女もまたセツナの刃を軽く横に流して、距離を取りました。

「貴様の大事なお友達の倉庫が壊れる方が早いな」

「ここの地域じゃ酒もワインも高い、弁償しろ、ジャンに謝れ」

「だったら早く貴様がこの世から消えろ」

「断る。命を奪われる理由もない、お前のその行為は意味を持たない」

セツナは構えたまま少女を睨みます。

「仕方ない……」

少女は目を閉じて、俯きます。

「？」

「私の名はヘレナ。貴様同様クローンだ」

次に目が開き、俯いていた顔がセツナの方を向きます。

その瞳は収縮し、まるで獣のような眼光。

「いくぞー!!」

ヘレナの移動する速度は異常なものでした。

気付いた時にはセツナの体が天井を突き抜け、外に放り出されていたのです。

地下の天井は見事に粉碎され、大きな穴が空いていました。

砂煙が舞う中セツナは空中で目の前にいるヘレナを視界に捉えま
す。

「これがクローンの力だ」

「クローン……?」

ヘレナは交差する様に刃を構え、そのまま地上へと落ちて行くセ
ツナに襲いかかります。

それと同時にセツナは目の前を横切る何かに視線を奪われました。

「あ……猫」

純白の子猫が空中にいる二人の間を通って行ったのです。

「なっ!?!」

ヘレナは何を思ったのかそこで瞳孔を元の形に戻してしまいまし
た。

二人より先にヘレナの刀が地面に落ちました。

その隙にセツナは左手にある刃の切っ先をヘレナに向けて投げつ
けます。

「くう!」

刃はヘレナの右肩に命中。飛び散った返り血がセツナの顔に付着
しました。

セツナは両足でしっかりと地面に着地します。

ヘレナはしゃがみ込む態勢で着地し、突き刺さった刃を無理矢理
抜き取りました。

後ろと前から血が吹き出し、左手で右肩を押さえます。

「くっ、情けない、たかが猫に驚くとは……」

「ナー」

先程の子猫がヘレナに近寄ってきます。

「ヒッ！！？」

顔を青ざめてお尻を完全に地面へと密着させる様子に、

（猫嫌い？）

セツナは内心そう思いながら二本の刀を拾いました。

鞘で追い払うと、子猫は人間では通れない狭い道へと逃げます。

二本の刀を持ち主であるヘレナに差し出しました。

「な……何故殺さない？」

セツナは眉をかしめます。

「犯罪組織は嫌いだ。人も殺したくない」

セツナは受け取ろうとしない刀を前に置くとヘレナに背を向けてそのまま夜の暗闇に去って行きました。

一人取り残されたヘレナは歯を噛み締めながら俯きます。

「情けない……」

そんなヘレナを覆う大きな影。

「！！」

その影の正体を見た瞬間、ヘレナは怒りとも思える感情を湧きあがらせます。

ヘレナは輝きの無い漆黒の刃を手に取り立ち上がりました。

夜の街に響き渡る破裂音。

ですがそれで騒ぐ住民はいません、慣れているのです。

地面に飛び散る血、落ちた刀と拳銃。

決して誰も外には出ません。

誰も巻き込まれたくはないのですから。

続く。

第一話（後書き）

読んで頂ければ幸いです。

第二話

レンガで造られた街での事です。時計の短い針は既に頂上を過ぎ、一時間経っていました。

唯一コンクリートで建てられた五階建てビル。

一般市民では届かない高級なテーブル、イス、ベッドやダンスが設置されたビルの一室で少女が一人住んでいました。

長い茶髪を腰まで伸ばした少女は黒いビジネススーツを着ています。

紅玉の瞳は力強く真っ直ぐでした。

少女はその瞳を壁に貼り付けられた正方形の鏡で確認します。手には蒼いカラーコンタクトレンズ。

「……」

少女の脳裏に同じ紅玉の瞳をした人物が浮かびます。

少女は目を細め、眉間にシワを寄せました。

しばらくしてドアが開かれます。

廊下には少女を待っていた部下二人。どちらもビジネススーツを着ていました。

「行くぞ」

長い茶髪を後ろで結い、蒼い瞳で視界に映る全てを睨む少女。腰には二本の刀を差しています。

少女の名前はヘレナ。

彼女には人間離れた能力があります。

だからこそ誰も逆らう者はいません。

「ボスを殺したのは私だ。文句がある奴は出てこい」
数時間前に部下達の前で放った言葉。

ヘレナの目に迷いはありませんでした。

そんな彼女はビルの三階にある大きな広間にいます。細長い机は四角を作って囲んでいました。

「ヘレナ、お前は休んでないとダメだろ。今はその傷を治すのが先決だ」

心配そうな表情でヘレナの所へやってきたのは、茶髪を刈り上げた男。

彼もまた黒いビジネススーツ姿です。

「私は貴様らより体は丈夫にできている。平気だ」

彼の名前はガイ。三十代くらいでしょうか、髭も少し生えています。

「ヘレナ……」

通り過ぎて行ったヘレナにガイは不安を隠せません。

「あのー」

「なんだ？」

次にヘレナの前にやってきたのは同じく黒いビジネススーツを着た男。

「次のボスは誰が？」

「もう決まっている。それはこの会議が終わり次第発表する」

ヘレナは指定されたイスへと座りました。

彼女の前には中年の者から年老いた者までが座っています。

「自分達のボスを殺すとは、何事かね？」

顎に生えた胸元まで届く真っ白な髭。

その髭を片手で大切に撫でる老人は渴いた声でヘレナに質問します。

「主、その話はまた別です。今はこれからの方針についての会議だ」

「ほっほ、それはすまなかったな」

それ以上の会話は無く、黙々と続けられる会議だけが進んで行きました。

そして、最後に質問は無いか、という問いに誰も答えず会議は終わろうとしています。

ヘレナは誰よりも先に立ち上がり、
「キングの新しいボスを紹介したい」

この発言に周りが騒がしくなります。

「……ガイ」

「えっ？」

ガイは目を丸くさせます。

ガイの方へ視線が集まりました。

「お、俺？」

「よかったな、キングをどうするかは貴様が好きに決めろ、ボス」

ヘレナはガイの肩を手で軽く叩くと広間から出て行きました。

他の者も同様広間から退場します。

「どうなつてんだ……」

ガイは顎に手を当てると少々困惑気味で立ち尽くします。

そんな風に困っている様子を思い浮かべているヘレナ。

自室にはヘレナ以外に一人の老人。

口元から笑みを零すヘレナの表情に老人は、

「何が面白いんじゃない？」

「ガイの困った顔を思い出したただだ」

「ほおー」

「な、なんだ、私が笑うのは変か？」

ヘレナは眉間にシワを寄せ主と呼ばれる老人を睨みました。

「ふむ……」

主は数秒程黙り込みます。

「似合わないのぉ」

「……」

感想を聞いた途端ヘレナの表情は曇ります。

ある意味口元は笑っていました。

「今日はカナンと散歩にいくのかな？」

主は話を変えます。

「たまには外の空気を触れないとカナンも退屈だろうからな」

「優しいのぉ、いいお母さんじゃな」

ヘレナは頬を赤らめていました。

「……」

「ほおっほっほ」

「しかし、その傷はしっかり休めておかんといくらお前さんでも危ないぞ？」

主は杖を突いてヘレナの部屋から去っていきます。

「まったく、そんな事はわかつている……」

太陽が街の空に現れてから人々は不安を胸に外を歩き始めました。ヘレナはビルの出入り口前で誰かを待っているようでした。

「ヘレナー」

高く透き通った幼い声。

純白のワンピースを着た小さな少女はヘレナの手を取り名前を呼びます。

「今日は街の外に出るぞ、カナン」

「うん！」

街の外は草原だけが無限に広がっているようでした。

風も暖かく、散歩にはちょうどいい気温です。

人影もありません。

「普通は外の方が物騒なはずだが、ここは逆だな」

「そうなのー？」

「そうだ」

カナンは草原を走り回ります。

蒼い瞳は空に負けないくらい輝いています。

雪のように白い肌は太陽に照らされても動じないでしょう。

その姿は何も知らないようでもあります。

カナンが草原の上に寝転びました。

雲の間に見える空を眺めるカナンですが、突然暗い影が彼女を覆います。

「？」

寝転んだまま首を上 to 動かすと、

「……」

紅玉の瞳がカナンの蒼い瞳を睨んでいました。
冬でもないのに赤いマフラーを巻いています。
茶色のコートと黒いズボン姿。

倭人特有の黒髪と幼い顔立ち。

「セツナ!？」

ヘレナは驚いた様子で叫びます。

セツナと呼ばれた少女は少し間を空けて、

「……母だったのか？」

訊ねました。

ヘレナは顔を真っ赤にさせます。

「んなわけないだろう!!」

「お姉ちゃんだれ？」

「……セツナだ」

カナンは上半身を起こし口を開けたままセツナを眺めています。

「？」

「……アホの子か」

「貴様!!」

ヘレナはセツナの襟首を掴んで振り回します。

揺らされながらもセツナは無表情を崩しません。

「洋国にいてカナンを知らないのか？ 貴様は」

「知らん」

そんな二人の様子を不思議そうに見つめるカナンと再び目が合う
セツナ。

「カナンは聖母カノンの娘、つまり次期聖母となる純真な心をもつ
た聖女様だ」

セツナの耳元でヘレナは小さく、荒く呟きました。

「簡単にいうとアホなのか」

「貴様あ!!!」

しばらく二人はそんな事を続けていました。

カナンはその二人を後にして体を全て地面に密着させます。

「聖母の話聞いた事ないのか？」

「無い」

「……」

ヘレナは呆れて言葉が出てきません。

「カナン、戻るぞ。貴様も来い」

「嫌だ」

「来い！ 昨夜の事もある。大事な話もある」

セツナの襟首を右手で掴みながら、左手でカナンの手を握ります。
そのままヘレナがいたビルへと帰って行きました。

街に入ると、人々は突然立ち止まり、皆同じように一礼をしたのです。

「聖女様！」

「聖女様に会えるなんて、ああ！ なんていう日でしょうか」

「聖女様！」

その姿にセツナは眉をひそめました。

「これが聖女様という存在。この街だけでなく洋国の人々はカナンに期待している」

「……」

「セツナ、人々は象徴があるだけでも安心するものだ。貴様の国に象徴というのは無いのか？」

セツナは首を傾げて、

「国……？」

と逆に疑問を浮かべました。

「倭国に決まっているだろう」

「倭国……」

その反応にヘレナは啞然とします。

三人はキングのアジトであるビルへと入って行きました。

「ヘレナ！ 休んでいろって言っただろ！！」

早朝にキングのボスとなったガイが先ほど帰って来たヘレナに対して怒りを露わにします。

ガイの怒鳴り声に動じないヘレナは睨みました。

「カナンの前で大声を出すなんて、ボスとして相応しくないな」

突然の大声に驚いたカナンはヘレナの後ろへと隠れてしまいました。

「……それはすまない。それと、その倭人は誰だ？」

ガイは一呼吸して、次にセツナへと視線を変えます。

「昨夜に話した通り、特殊クローンだ」

その言葉を聞いた瞬間、ガイの顔は険しくなりました。

まるで敵意を抱いているかのように。

「カナンを部屋まで送ってほしい、私はセツナと大事な話があるから地下の部屋を借りるぞ」

「ああ」

「……」

ヘレナから離れ、ガイの手を掴むカナン。

すれ違ったと同時に、セツナとガイは一秒間だけ睨み合います。

たった一秒間だけでしたがそれだけでセツナは何かを感じ取ったのでしょうか、眉をしかめました。

地下へと続く階段を下りる途中で、

「なんだあいつは」

セツナは問いかけます。

「この三代目ボスだ。どうやら貴様の事を嫌っているらしいな」

ヘレナは少々の笑みを含めて答えました。

地下は薄暗く、対面するかのように鉄のドアが道を挟んで向かい合っていました。

右側一番手前のドアをヘレナは開けます。

「ここに入れ」

「……」

室内は木製のテーブルとイスが真ん中に設置されています。天井にある蛍光灯の明かりは今にも消えてしまいそうです。

「昨夜、先代のボスが貴様の家に来たのは覚えているな？」

「……覚えている」

「先代のボスが失礼なことをした。そして私も、申し訳ない」
謝罪を終えヘレナがイスに座ると、セツナも座りました。

二人は対面した状態です。

「あの男を、殺したのはお前か？」

セツナの問いにヘレナは黙って頷きました。

「殺すというのが、人のする事なのか？」

激怒するわけもなく無表情のまま問い続けるセツナ。

その様子を落着いた、悲しげな瞳で見つめるヘレナ。

「私は、人じゃない……」

「？」

ヘレナは自身の蒼い瞳に手を伸ばしました。

「……」

その瞳から取れたのは蒼いカラーコンタクトレンズ。

さつきまで蒼かった瞳は赤ワインのような色に変わっていました。

「人の形をした……化け物だ」

「化け物？」

セツナは眉をしかめます。

「本当に何も知らないようだな」

「知らん」

ヘレナは目を細めると、

「……最近この街にアドヴァンスという宗教集団がやってきた」
話題を変えます。

「アドヴァンス？」

「人間の命は平等であり、尊重すべきもの……というのがその宗教の言葉だ。貧しい人間に救いの手を差し伸べ、普通なら高額の治療代も全てタダにしている」

「それに何か問題でもあるのか？」

ヘレナは頷きました。

「組織にとっては大問題だ。この街の病院は全て我々キングが仕切

っている、それを無料にされては我々の資金が減ってしまう」

「……」

セツナは眉をしかめて冷たい視線をヘレナに送ります。

そんな反応を見せたセツナにため息を吐きそうになりますが、ヘレナはそれを堪えます。

「それだけではない、アドヴァンスはクローンを差別している」

「クローン……？」

ヘレナは立ち上がったと思えばセツナの顎をいきなり掌で掴み、

「私や貴様のような存在を消しまわっている！ 奴らはクローンを迫害する運動もしているということだ！！」

どこまでも真っ直ぐな瞳がセツナを睨んでいました。

「だからどうした」

「貴様……」

予想していた通りの返事ですが、ヘレナは苦い表情。

セツナは掴まれている顎から掌を無理やり離すと、鋭い冷めた瞳孔で睨みかえます。

イスから体を離すと、ヘレナに背を向けます。

「そうやって分別しているのは人にとって当たり前の事だ。ゴミは分けられないくせに、人種となるとすぐに区別できる。今さら差別なと言葉はいらないだろう。私は誰も殺したくない、血も見たくない……そんな事は勝手にやればいい」

セツナは鉄製のドアを開け、ヘレナの前から完全に姿を消しました。

重々しく閉じられ、ヘレナは一人頭を抱えています。

「クローンを生みだした人間にとって私も貴様も……他の奴らも化け物でしかない。誰かを殺さずに生きていけるわけがないだろう……」

……

ヘレナは目を閉じ、自身の右肩と左腰に手を当て、とても苦痛な表情を浮かべていました。

続く。

第二話（後書き）

よろしくお願いします。

第三話

朝から忙しく、レンガで造られた道路に転がっている死体を運ぶ管理者。

それがこの街では毎朝の出来事です。

一般市民が寄ることのない重たい門で区切られた道。

門の向こうにはビルが二軒建っていました。

コンクリートで造られています。

ビルの出入り口で座り込んでいる一人の少女。

その瞳は青空のように澄んだ曇りのない色で、純粹そのものです。触れてもすり抜けてしまいそうな滑らかな茶髪。

純白のワンピースに身を包んだ幼い少女は空を見上げていました。そんな彼女を突然覆う黒い影。

「？」

少女はその影の本体へ顔を向けました。

真っ黒なローブ姿で、顔はフードで隠れてよくわかりません。

二メートルはあるでしょうか、少女は頑張つて背伸びをします。

口元からは不気味な笑みを浮かべていました。

そして……。

「なんだ？」

街から少し離れた場所にある小屋の主は無表情のまま、玄関前で不機嫌そうに立っている人物を見ます。

「貴様に依頼が……つておい!!」

相手が言い終える前にドアを閉めます。

紅玉の瞳を細め、倭人特有の幼い顔を両手で触りました。

「とにかく話だけでも聞け!!」

ドアの向こうから聞こえてくる怒鳴り声に眉をしかめます。

思い浮かぶ顔は自身と同じように紅い瞳と、自身とは違う真っ直ぐな表情。

「セツナ!!」

名前を呼ばれ、セツナはドアを再び開けました。思い浮かんだ同様の人物が目の前にいます。その人物は長い茶髪を後ろで結っていました。

呆れたような表情がセツナの視界に映ります。洋人のようです。左右の腰には刀を一本ずつ差していました。

黒いビジネススーツ姿の彼女は男よりも遅いでしょう。

「カナンが誘拐された」

「ああ……アホの」

「黙れ! 聞け。貴様と私はこれからカナンの救出に向かう」

腕を前で組みながら説明をします。

「場所はアドヴァンス教会。誰にも見つからないように気をつけろ」

「ヘレナ、私はやると言っていない」

「金はやる。望めばいくらでも出す」

「ム……」

セツナは黙りこんでしまいました。

「文句はないな、行くぞ」

ヘレナとセツナは横に並んで街へと歩き出します。

街の出入り口にある門を通り抜けると、そこは不安と恐怖に怯えながらも外を歩く人々がいました。

見慣れている二人は不安も恐怖もなく、前を歩きます。

「ヘレナ……護衛をつけなかったのか?」

「一人で勝手に外へ出るとは思わなかったのだ。いつもは地下で大人しくしているのに」

ヘレナが苦い表情のまま、呟きました。

「まるで監禁」

「監禁じゃない! カナンは」

「おい!」

二人の会話を遮る男の声。

「?」

「なんだ、武装信者か。ここは別に立入禁止区域じゃないはずだろ？」

目の前にはアサルトライフルを背負って立っている五人の男。顔を覆うゴーグルで表情は窺えません。緑色の制服と黒色のズボン姿。

「今回よりここは人間以外立ち入り禁止だ。さっさと失せろ」

ヘレナは腕を前で組むと武装信者を睨みます。

「お前らにも少しは知能があるだろ、人間には劣るだろうけどよ」
含み笑いをして、手の甲を上にして追いつ返すような仕草を繰り返す武装信者。

「……」

セツナは口を小さく開けたまま武装信者を傍観します。

「セツナ、こっちに来い」

セツナの襟首を掴んでその場から退散を始めたヘレナは住宅街の路地裏へと足を踏み入れました。

「アドヴァンスも警戒しているようだな、普段は外に出てこない武装信者がいる」

ヘレナは背中を壁に密着させます。

「しかも、立ち入り禁止区間がいつもより広くなっているしこのままではレヴェルとも連絡が取れないな」

「レヴェル？」

セツナはその隣で同じように背中を壁にもたれさせました。

「犯罪組織と言えばそうなるが、ある意味国を管理するような組織だ。貴様みたいに人殺しを嫌う奴にはいいかもしれないな」

「……興味ない」

「フン、そうだろうな。さっさと行くぞ、裏口を探す」

早足で路地裏を出ていくヘレナの後ろを黙って追いかけるセツナ。住宅街から人気の少ない廃墟地区へと向かいます。

瓦礫とゴミ、そして腐敗した何かの遺体。

あちこちに散らばっています。

崩壊したビルの建物もいくつかありました。

「……？」

セツナは荒廃な景色を見渡していると、

「人？」

崩壊したビルの上に人がいるのを確認できたようです。

真っ白なロープに身を包んだその姿にセツナは自然と瞳孔を収縮させていました。

どうやら少年のようです。

その少年はセツナと目が合いました。

「……」

微笑む少年の口元。

セツナは口が小さく開きました。

「セツナ……！」

怒鳴り声が一瞬にして耳を騒がしくさせます。

意識が飛んで行ったかのような錯覚に襲われていたのでしょうか、セツナは我に返ってヘレナを視界に映しました。

「早く来い、ここから先に確か地下道があったはずだ」

「わかった」

そう返答したセツナはもう一度少年がいた場所へと視線を変えましたが、そこには誰もいませんでした。

「気のせいか……」

セツナは呟きます。

二人が入ったビルは一階部分を残してそれ以上の階はありません。上へ続くはずの階段だけが残っています。

晴れた青空がはっきりと見えます。

「ここは……なんだ？」

「何って、貴様も一応この街に住んでいるなら歴史ぐらい知ったらどうだ」

「？」

眉をひそめるセツナ。

「千年前、錬金術を使える一族がここで住んでいたのだ。しかし、政府が錬金術の力を恐れてこの地区ごと消滅させた。今もずっとこのまま、誰もここを復興させようとする者はいない」

地下へ続くはずの通路を探す為大きな瓦礫や破片をひっくり返し
ながら、ヘレナは説明しました。

「こんな建物、千年前にあったのか？」

崩れているビルを見渡し、セツナはヘレナに質問します。

「錬金術は万能の力、物質があればなんでも造れる。手のかかるものですらあつという間にできるのだから、可能性はある」

ヘレナは地面に埋もれている最後の瓦礫を拾い上げます。

その下には四角い穴。

地下へ続く階段もありました。

「ここだな、行くぞ」

「……！」

セツナは立ち止まりました。

「聞こえているのか、セツ……ナ？」

ヘレナは後ろを振り返りました。

すると、いるはずのセツナがそこにはいません。

「なっ……」

その代わり、十人の武装信者がアサルトライフルを手に構えてヘレナを囲みます。

「クローンは人間にとって悪魔！」

男達の怒ったような声。

「我ら聖女様にこれ以上近寄るな！」

「化け物！　ここで終わりだ！！」

次々とヘレナに罵声が飛んできます。

ヘレナは、啞然としていましたがすぐに、

「黙れ！！」

怒声と一緒に二本の刀を鞘から抜き取りました。

「化物を殺せえ！！」

一人の声で武装信者全員が動きます。

引き金を人差し指で押さえる瞬間、ヘレナは瞳孔を収縮させました。

その瞳に映るのはスローモーションの世界。

全ての動きがまるで止まっているかのようにヘレナからは見えません。

誰が一番速く押さえるかを確認したヘレナは自身の前にいる信者へと漆黒の刃を向かわせました。

「うわっ！」

下から上に刃が動きます。

斬れたのは人ではなくアサルトライフル。

銃身が斬れ、男は思わず後ろに下がってしまいます。

「ば、化け物！！」

その隣にいた武装信者が持っている銃身を灰色の刃で斬り捨てる
と、柄が顎を突きます。

口から唾液を零してそのまま仰向けに倒れた武装信者。

「このヤロ！！」

銃弾がヘレナに向かって発砲されようとしています。

すると、左手にあった漆黒の刃がアサルトライフルの銃口を塞ぎ
ました。

同時に発砲した銃弾は外に出る事は無く、内側で暴発してしま
います。

銃身が崩れ、形を失い武装信者はアサルトライフルから手を離し
ました。

「な、なんだよ、こんな話聞いてないぞ？ クローンは無知能で低
俗な奴らだって……」

他の武装信者も後ずさりをしてヘレナから距離を取ります。

「ば、馬鹿、無知で低俗だからこんな事しかできないんだよ！」

「早く、銃を持っている奴は撃て！！」

ですが、誰も撃とうという者はいません。

ヘレナは漆黒の刃を右腰にある鞘へと戻しました。

右手に残っている灰色の刃は武装信者に向けられます。

瞳孔を通常の形に戻し、ヘレナは空気を斬るようにその刃を下ろしました。

「さつさと私の前から消えろ、今度は貴様らの肉体を斬り刻むぞ」

そのままの瞳でも睨みつける力強さは変わりません。充分です。

真つすぐに、殺すという行為でさえ迷いはないような瞳。

「うああああ!!」

残りの武装信者は倒れている仲間を乱暴に掴んで走り去っていき
ました。

ヘレナは左腰の鞘に刀を戻すと、前で腕を組みます。

不機嫌そうに上へと首を向けました。

その視線の先には、余裕の表情でヘレナを見下ろすセツナ。

「御苦労」

「き……キサマァー!!」

ヘレナの怒声が廃墟地区、いえ、街全体に響き渡ります。

続く

第三話（後書き）

読んで頂ければ幸いです。

第四話

「貴様は馬鹿か!？」

怒鳴り声が響き渡る地下通路。

辺りは薄暗く、今にも消えてしまいそうな蛍光灯が間隔をあけて天井に設置されています。

そこに二人の少女がいました。

背中にまで到達する長い茶髪を後ろで結び、迷いのない真っすぐな紅い瞳は前を睨んでいます。

黒いビジネススーツ姿。腰には二本の刀が差しており、内ポケットには二挺の拳銃。

名はヘレナ。

その後ろを黙々と歩く倭人の少女。

倭人特有の黒い髪と幼い顔立ちは洋国で目立ちます。

瞳はヘレナ同様紅く、茶色のコートに黒のズボン姿で首には冬でもないのに真っ赤なマフラーを巻いていました。

腰に一本の刀を差しています。

冷え切った鋭い眼光は自然と周りを睨んでいます。名はセツナ。

「何故逃げた!？」

後ろを振り返らずヘレナはセツナに対して問います。

「それは私の仕事ではないからだ」

淡々と感情も無く答えました。

そして、

「殺さなかったな？」

今度はセツナがヘレナに訊ねます。

「……フン」

それ以上の会話はありません。

直線が続く地下通路を抜け、地上に行ける階段までに辿り着きました。

「教会の中心部にカナンはいるはずだが、もしかすると一般人もいるかもしれん、武装信者も巡回している可能性が高い。気をつけろ」
一段一段慎重に上っていくヘレナ。

地上に頭部を出し両手に拳銃を持ちます。

そして、拳銃を胸の前で突きだし自身の体を地上に露出させました。

天井のステンドグラスに描かれた微笑む聖女とその周りを囲む天使の絵。

太陽の光がそこから差し込みます。

光は聖堂の真ん中、縦二列に並んでいる長椅子の間を照らしていました。

静かな時間がこの場所だけで流れています。

「……武装信者どころか一般人もいない」

後ろを振り返ると三メートルはあるであろう教本を手に佇む聖母像が建っていました。

「この地下は非常用の脱出通路か、民衆より大事な神官共を逃がす為に造られたという事だろうな」

聖母像の前に置かれた教壇、その下には先程二人が出てきた地下通路の階段。

「誰がいる」

教壇から赤い絨毯が敷かれた真ん中を速足で進むセツナ。

右側四番目の長椅子と五番目の間で止まりました。

その間に入ると下に手を伸ばします。

「？」

胸の前で腕を組みながらヘレナはセツナの行動を眺めていました。

「……猫」

にゃーん。

セツナの両手に抱き上げられた灰色の猫。

愛らしい眠たそうな目があちこちを見渡しては舌を出して口を舐めています。

「ひっ!？」

突然ヘレナが顔を青ざめて組んでいた腕を緩めてしまいます。

「と、カナン」

猫を下ろすと今度は空よりも蒼く澄んだ瞳をもつ少女の両脇を掴んで抱き上げます。

純白のワンピース姿のカナンは今の状況をよくわかりません。

「き、きき貴様! 猫を離すな! 早くここから追い出せ!」

カナンも大事ですがヘレナはとにかく地下に隠れてしまいました。

「……」

セツナは鞘で灰色の猫を威嚇し、驚いた猫はすぐにその場から逃げました。

「追い出したな？」

恐る恐る顔を出しヘレナは何も無いのを確認した後、すぐに二人の元へと向かいます。

「カナン、この信者は？」

「皆外に出ちゃった。だからさっきの猫と遊んでたの」

「あんなのと遊ぶな近寄るな」

ヘレナは不機嫌な気分でカナンの手をつなぎます。

「……」

その後ろを黙ってついて行くセツナ。

そして、聖堂の正式な出入り口には黒いローブで全身を覆う人物。

「大切な聖女様を誘拐するとは、まさに外道。さすがは穢れを知る者、クローンよ」

低音で響く声。

「!？」

「あ、おじさん」

「……？」

三人は振り返ります。

誘拐されたことすら理解していないカナンはその人物を見ては笑顔になりました。

その人物は二メートルはあるだろう身長とロープの上からでも分かるほどに筋肉質の体格。

右手には分厚い本。首には十字架のアクセサリーを巻いています。不適な笑みを浮かべていますがフードを被っている為ハッキリとは見えません。

「この街に住み着く鼠共を駆除するのに手間が省ける。神は喜んでおられる」

「っ、黙れ！ 何が神だ！ 貴様らがやっている事はこの街の組織と同様に人殺しだろ！！」

ヘレナは灰色の刃と漆黒の刃を抜き取ると切っ先を向けて怒りを露にします。

「フハハハ、我々は殺しなどやっていない。しているとすれば街のゴミ掃除だよ」

「貴様ア……」

柄を握る手に自然と力が入るヘレナ。

「我が名はドイゾナー。我は神の代弁者なり、錬金術の継承者なり」
教本を開け、ドイゾナーと名乗った男は何かを呟きました。

「？」

セツナは眉をしかめて、ドイゾナーを睨みます。

「！ カナンを連れて逃げろ、セツナ！！」

すぐに理解できたヘレナは前へと足を踏み出し人間では追いつけない速さで動きました。

ドイゾナーの足元付近で止め、二本の刃を交差するように斬りつけます。

ですが、肉を斬ったかのような感覚は掴めずヘレナは啞然。

口元の笑みを絶やさないドイゾナーは、

「フハハハ、我を殺す事は不可能だ」

霧のように消えたと思えば低音の声はヘレナの背後から。

「！？」

振り返った途端ヘレナは自身の視界が一瞬暗転し、刀が手から離

れていくのを確認します。

右肩に電撃が走る痛みを感じたヘレナ。

両膝の力が抜け床に座り込んでしまいます。

「……カナン」

セツナはカナンの両目を手で塞ぎながら耳元で言いました。

「教壇の下に通路がある、そこから走って逃げろ」

「？ うん」

カナンはよくわからず視界を隠されたまま地下通路におろされてしまいます。

走っていくカナンを見送った後、セツナは白銀の刃を抜き取ると地上へと戻って行きました。

聖堂の真ん中で右肩を押さえながら苦悶の表情を浮かべるヘレナ。
「くっ、錬金術は千年前に滅んだはずだ。なのに、何故貴様は使える」

「我は錬金術の継承者、神に選ばれし者である我にできぬ事など無いぞヘレナ、お前が自ら飼い主を殺したことも知っている……フハハハ！」

両手の甲から出てきたのは鋭いナイフ。

ドイゾナーの足元に浮かび上がる真っ白に光る円には、不可解な文字と数式が書かれています。

「ふざけるな！ 私は飼われてない！！」

瞳孔を収縮させ、獣の眼光でドイゾナーに斬りつけようとしたヘレナですが、その手は止まりました。

「効かないだろ？」

ヘレナの視界は変わりません。物体の動きをスローモーションのように映せるはずが、何も変わりません。

不気味な笑み。ドイゾナーは再び呟きます。

「我は錬金術の継承者なり」

真っ白に光っている円が二重になり、ドイゾナーは手の甲に装備されたナイフを垂直に飛ばしました。

近距離から飛ばされたナイフを避ける事は出来ず、ヘレナの右腰に突き刺さります。

「……！」

刺さったナイフは電撃のようなものを体中に流しヘレナを麻痺させました。

「まだ完治もしていない体で挑むその姿勢は素晴らしい。だが、所詮無駄な悪足掻き」

「はあはあ………」

右肩と右腰から止まらぬ血が。

覚醒と呼ばれる能力も尽き、元の瞳に戻ってしまったヘレナはドイゾナーの後ろにふと視線が動きます。

二メートルもある身長より高くに、白銀の刃。

「セツナ？」

ヘレナは体をよろけながらも立ち上がらせます。

「しぶとい……しかし美しい。まるで我が」

そこでドイゾナーは喋るのを止めました。いいえ、強制的に止められたのです。

腰から上下に離れていく身体。その間から見えたのは無表情のまま刃を振り下ろしたセツナ。

「セツナ、気を付けろ！ 後ろだ……！」

またもドイゾナーの体は霧のように消え、セツナの背後にまわっていました。

同じようにナイフが飛んできます。

振り返ったセツナは右手に掴んでいた鞘でナイフを弾き返しました。

「フハハハ、見覚えのある顔だ。殺人鬼のようなその眼は」

「誰が殺人鬼だ。私はただの一般市民にすぎない」

戯言。そう笑ってドイゾナーは二人から少し離れます。

不可解な術式が書かれた円に囲まれるドイゾナー。

「錬金術の前では化物がどれほど無力かわからないようだな」

「？」

真っ白に光っていた円が突然黒くなっていました。

「我は錬金術の継承者なり、神の代弁者なり、神の命により忌まわしき者を……滅さん」

最後の言葉と同時に地面が揺れ始めます。

「くっ、傷が……」

震動の衝撃でヘレナの傷口が痛み、慌てて長椅子の間に入ると前列の長椅子を壁にしてもたれました。

「人間とは違う体なのに、情けない」

ヘレナは苦しい表情のまま俯いてしまいます。

その間、セツナは揺れが続いても微動もせずに立ち尽くします。

「何をするつもりだ？」

「ハハハ、すぐにわかる。さあ貫け！」

「！？」

突如地面から槍のような鋭い岩が飛び出してきました。

セツナは自慢の反射神経で胸元まで来た鋭い岩を回避しますが、次々に鋭い岩は襲いかかってきます。

背後から、壁から、地面から、何度も何度も

そろそろ疲れ果ててきたセツナは回避するのも弾くのも遅くなってきました。

「……いつまで続く？ 無知なまま死ぬのもまた楽だろう」

「黙れ」

「哀れだなあ、フハハハ。お前の先祖はそんなものでは無いが……さあ終わりだ」

セツナの左手が精一杯の力で掴む白銀の刃。

前の壁から飛び出てきた鋭い岩を粉碎させます。

「……！」

刀が手から離れて行きます。

すぐに手を伸ばしますが、

「しまった……」

セツナは力が抜けたように眩みます。

地面から飛び出てきた鋭い岩にセツナは気付いていました。

気付いていたはずが、反応できません。

肉が裂けるような生々しい音。

セツナの顔面、服に飛び散る液体と鉄分の臭い。

「!？」

「さつさと、片付けんか……くっ、この馬鹿者」

口から嫌でも出てくる血と味わいたくない鉄分。

腹部から漏れ出す多量の血とその腹部に突き刺さった鋭い岩を受け止めたのはヘレナだったのです。

苦痛で歪める表情のヘレナ。

「……」

セツナは自分の顔に飛び散った血液をゆっくり手で拭きます。

拭った手は血まみれで、思わずセツナは震わしました。

心臓が高鳴る感覚がセツナを襲います。

瞳孔が自然と収縮していき、両手を握りしめたセツナ。

ドイゾナーを視線に映すと獣のような眼光に変わりました。

殺してしまう？ 違う、殺すんじゃない。

脳内で誰かが話しかけてきます。

優しく囁いてくる女性の声。

行動不能にするの。あなたにはそれができる。

聖母のように慈悲深く、暖かい。

セツナは黙って刀を拾います。

「なんだ？ この殺意は」

ドイゾナーは思わず後ろに下がってしまいます。

セツナの視界は夕陽のように鮮やかで時々黒い斑点模様が映し出されます。

一步、足を踏み出したセツナ。

「まだやるのか？ ならば今度こそ仕留めてやろう……ぬ!？」

ドイゾナーは周りを囲んでいた円が突然消えた事に驚き、地面へ

視線を映した瞬間。

その視界に映ったのは白銀の刃でした。
切っ先はドイゾナーの喉を捉え、いつの間にやら掻っ切っていました。

辺り一面に初めてドイゾナーの体内から漏れた血が飛び散ったのです。

「ぐうううううううー!!」

野太く呻くドイゾナー。

「……」

喉を両手で押さえますが、しばらくしてドイゾナーは背中から地面に倒れました。

フードが取れ、短い銀髪と白目を剥いた顔。鬼のような形相です。右目には縦に入った傷がありました。

「覚醒が使えたのか……」

ヘレナは残りの力を振り絞り、鋭い岩から体を引き抜きます。
少々の呻き声を発してセツナの所へフラフラになりながらも歩きました。

「ヘレナ!!!」

聖堂の入り口から聞こえた男の声。

刈り上げた茶髪に顎に少し生えている髭。黒いスーツ姿。

「ガイ……どうした?」

「どうしたもうも、傷だらけじゃないか!! すぐに病院へ行くー!!」

ガイと呼ばれた男はヘレナを慎重に担ぎます。

「待て、セツナが」

「あいつは無傷だ、ほっとけ。カナンが心配している」

「……」

ガイに運ばれ振り返る事もできないままヘレナはその場から去って行きました。

続。

第四話（後書き）

よろしくお願いします。

第五話

レンガで造られた街でのことです。

人の出入りが少ない地区に建っているコンクリートのビル。

太陽がようやく半分顔を出した早朝、ビルの近くで忙しそうに動く中年の男がいました。

「何をしている？」

その様子を見無表情で眺めていた少女は中年の男に質問します。

茶色のコートに黒色のズボン、首元には真っ赤なマフラー。腰に差した刀は洋国では珍しい倭国の武器です。

「街の清掃しかないだろ。お前も用が無いなら街に来ちゃ駄目だろうに、どうした？ セツナ」

中年の男は少女の事を知っているようです。

小型の貨物自動車へと布で包まれた死体が運ばれ、中年の男は軽くセツナに手を振りました。

セツナはただ小さく頷いて、帰っていくのを見送るだけ。

それから太陽が完全に姿を現した頃。

セツナは刀を何度も鞘から抜いては白銀に輝く様子を見つめていました。

その姿を内側にいる一人の男性が怪訝そうに睨んでいます。

黒色のスーツ、ズボン、ネクタイ。男は刈り上げた茶髪を片手で触りながら出てきました。

「ヘレナは休養してもらってる。悪いが帰ってくれ」

その声に反応したセツナは刀を鞘に戻すと、ゆっくり立ち上がります。

そして、

「お金をもらっていない」

と、答えました。

「……は？」

男は数秒、時が止まったかのような気分です。

「っ貴様！ 少しは心配しろ！！」

二人の間を割って入ってきたのは男と同じ服装の少女。

長い茶髪を後ろで結び、迷いのない透き通った紅い瞳でセツナを睨みつけます。

「ヘレナ！？」

男は驚きます。

「……」

セツナは無表情のままヘレナに視線を変えました。

その反応に息を吐くと、今度は男を睨みます。

「ガイ、ボスならそう簡単に姿を見せるな。客人の相手をするのは我々部下の仕事だ。ボスの命は安くない、そのことを理解しろ」
ボスとしての行動について注意をするヘレナ。

「……わかったよ、だが今の状態で危ないことをするな。これは命令だからな」

ガイは渋々二人から離れてビルの中へ戻っていきました。

「何故、キングのボスは皆こうも前へ出る」

腕を組みながらヘレナは尽きない悩みの一部を吐き出します。

「それと貴様、カナンを助けてくれた報酬だ。望む金額をこの紙に書いておけ」

差し出した白い紙切れとペン。

セツナはそれを受け取ると軽やかにペンを走らせました。

「ん」

受け取ったヘレナは紙に目を通します。

「そうだな、もっと増やしても構わない」

「？ 結構な額だと思った……」

ヘレナは苦笑しながら紙を再びセツナへ。

「キングにいれば金はいくらでも稼げる。もう一度聞くが、我々キングに入る気は……」

「無い」

相手が言い終える前に即答しセツナは紙を返して元も地区に戻ろうとしました。

「っておい！ まだ話は終わってない！！」

怒鳴り声でセツナを追っていくヘレナ。

昼だというのに人通りの少ない街は静かです。

フードで首から上を隠す親子が壁際で座り、男達は背中にショットガンを装備して歩いてました。

「外に出よう、貴様に少し話しておきたいことがある、聞きたいことも」

「……」

セツナは言われた通りに街の外へ出ると、果てしなく続く緑の草原と簡易的に舗装された道が広がります。

特別な景色ではない、見慣れた風景です。

街より少し離れた先には一軒の小屋。セツナが現在住んでいる家です。

その近くで二人は横に並んで自然豊かな景色を眺めていました。

「カナンを救出してから一週間は過ぎたな」

「それがどうした？」

苦い物でも口にしたような表情でヘレナは答えます。

「アドヴァンスの動きが全く変わらない、教祖を殺したというのにクローン迫害も激しくならない、民衆も信者も騒ぐ様子もない。まるで何も無かったように」

「なら、生きているのか、あいつは」

その返答にヘレナは首を横に強く振り、否定しました。

「馬鹿な、喉元を近距離から掻っ切られて、しかもあんなに多量の血で生きているはずが無い！」

「そうか……殺したと思っていた」

今でも自分の手に残る肉を切り裂く感触。

殺してはいないと、セツナは何故か殺し損ねたことに焦っています。

「？」

殺したくないのに、人殺しなどするべき行為ではないと思つていたセツナ。

この悔しさに似た感情はなんだろうか、と疑問を浮かべてしまいます。

「カナンがあんな邪教に奪われたら今まで守ってきた意味が無い、あそこにては穢れてしまう」

「穢れ？」

ヘレナは腕を前に組んで、説明をします。

「カナンにも、一応クローンの血が流れている。彼女がもし他人の妬み、憎悪を知ってしまったえば精神が侵され瞳は変色し、最悪人格は崩壊する。これは普通のクローンと似た症状だ」

「？」

セツナは眉をしかめて、その説明に理解できていない様子。

「……クローンにはそれぞれタイプがある、まずタイプ01は短命以外は普通の人間とあまり変わらない。タイプ02は戦闘向けに作られた短命かつ瞳の色が赤い。そして、私と貴様特殊クローンは……生きた人間そのものを使って作られた存在だ」

「生きた人間……」

ヘレナは自身の腕を握り締め、頷きます。

「人間だった記憶を持っている者もいれば元の人格が破壊され記憶を失う者もいる。貴様は後者だろうな」

「お前は違うのか？」

苦笑しそうになるヘレナ、しかし、すぐに真顔に戻って説明を続けました。

「記憶は今も残っている、私は人格破壊される危険性もあるというのに望んで特殊クローンになったのだから」

「どうしてだ？ 人を殺すためなのか？」

「そついうわけじゃない」

いつもならあまり興味をもたないセツナが積極的に質問をしてい

ます。

「……座って話そうか、自分の思い出話をするのはあまり得意じゃないが、貴様も私と同様特殊クローンだ素直に喋ろう。貴様を信頼して話すのだからな？」

「ん」

横に並んだまま草原に座り込む二人。

「私の本名はユリウス・クラウベル、銀行家のもとで生まれたお嬢様だった。生まれてすぐ私は不治の病に侵され両親に見放されてしまった」

「……」

「母は治らない私より、高価な猫を大事にしていた、またその猫が我が物顔で家をつろつくものだから体が不自由な私にとって羨ましかった。それと同時に猫そのものが怖くなった」

（だから猫が苦手なのか……）

内心そう思いながら、黙って聞くセツナ。

「私が十歳になったときに母が妊娠してな、父が私を売り払おうと知り合いに相談していた。それをたまたま耳にして、私はもうショックでここまで愛されてなかったのかと思うと死にたくなつたよ」

笑っているようで笑っていない表情のヘレナは少し目を細めます。

「とうとう私は売り払われ、見知らぬ男達に体を捧げる売春婦になるか、どこかわからない怪しい科学者の実験体になるか。二つの選択肢を出された」

「それで実験体になることを選んだのか」

「当然だ。あんな両親のことも猫のことも病気だったことも全部忘れられるなら喜んでなる。だが、変わらなかった。まあ病気そのものは治ったけど」

「……お嬢様っぽくない」

「黙れ、最初からこんなのじゃないぞ私は、それに最初こそは戸惑ったりもした。いきなり研究室に犯罪組織がやってきて誘拐されるわ、そのまま銃や剣の扱い方を無理やり教え込まれるわでいつの間

にかこうなっていた」

セツナは数秒黙り込み、次に、

「やったな、脱お嬢様だな」

感情も無い声と顔で親指を立ててヘレナに向けました。

「貴様はホントに……、そういう貴様はいつから記憶が無い？」

その問いに、セツナは首を傾げます。

「覚えていない。何がどうなっていたのか考えたことが無い、いつの間にか街の近くにいた」

「それだけか？」

「ん」

セツナは頷いて答えました。

そう答えたセツナはふと眉をしかめます。

「……カナンは？ どうして犯罪組織にいる」

「そういえば詳しく言っていないな。カナンはキングの初代ボスと、聖母カノンの間で生まれた子だ。カノンがクローンでボスが人間だった。まあどちらも早くに死んでしまったせいカナンは両親のことを知らないまま育ってきたのだ」

ヘレナはそう言つて、軽くため息を吐きます。

「そもそもカナンがこんな汚れた仕事ばかりの犯罪組織にいていいのか、両親のことを何も知らないあの子を守っていけるだろうか……そう疑問に感じるときもある」

俯くヘレナをよそに立ち上がったセツナ。

「？」

睨みつけるような目つきで草原を見渡します。

一歩二歩と、前に進むと立ち止まりました。

「どうしてお前達は、彼女自身に決めさせない」

ヘレナには届かない呟き声。

何のために意思があつて、何のための自由だ。

セツナは眉をしかめました。

「どうして、私は特殊クローンになった」

この言葉はヘレナの耳に届いたようです。

ですが、その問いについては返答しませんでした。

「……金はどうする？　すぐに用意できるぞ」

「ジャンに全て渡してほしい」

「あのバカ息子に？」

セツナは無表情のままですが、

「バカって言うな、あれでも命の恩人だ」

少し怒っているようにも見えます。

「ほーお、よっぽどのことがあつたらしいな」

「ム」

マフラーで口元が隠れてしまうほど顎を引っ込めました。

興味津々のヘレナは笑みを浮かべています。

「私は思い出話を語ったのだから、貴様のことを聞く権利はある」

「ムム」

セツナは眉をしかめて、喋りたくないサインを出しますがヘレナはそれを無視します。

「詳しく言わなくてもいい大体で構わない」

「……」

拒否サインを止めたセツナはマフラーから口を出しました。

鋭く紅い瞳と真っ直ぐな紅い瞳が視線を合わせます。

「何かに逃げている最中に、山賊に襲われてしまって怪我をした。

街の外で気絶していたらジャンに助けられ、その恩を返すために何でも屋を開業している。そして今に至る」

単調な説明を終えて、セツナは口を閉じました。

「本当に大体で終わらすとは……まあ少しは理解できた。さて、話は終わりだ資金については部下にジャンへ渡すよう伝えておく」
「ん」

セツナは頷くと、そのまま見送ることもなく小屋の中へと入っていききました。

振り向くこともなくヘレナは街へと足を進ませます。

続

第五話（後書き）

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4445s/>

セツナ

2011年10月28日03時13分発行